

新たな体育の始まりに

平成18年度 共通科目「体育」新入生講義

萩原武久¹

1. はじめに

体育センターでは、新1年生を対象に4月の初回授業で、「新たな体育の始まりに」と題して、筑波大学での共通科目「体育」に関して理解を深めるべく講義を実施している。この講義では、体育センターが考える「体育」の意義や目的を伝え、学生が小・中・高等学校と12年間の学校生活から作り上げた「体育」のイメージを刷新し、体育の新たな価値や意義を再発見させることを目的としている。また、学生が体育を学ぶことで、体育・スポーツの魅力を感じ、様々な感動を体感することも目的としている。

講義では、冒頭、日本サッカー協会が作成した2002年FIFAワールドカップ日韓大会のテクニカルビデオを観賞させる。これは、ワールドカップ日韓大会を彩った様々な印象深いシーンから構成されている。数々のスーパープレーから喜びを身体全体で表現する選手、反則をされ痛みに顔をゆがめる選手、敗北に呆然とする選手など、そこで表現されているのはこれからの長い人生で経験する様々な出来事であり、まさに「人生」の縮図ともいえるものである。おそらく、4月入学時の1年生の心境は、決勝のドイツ戦で勝利し、優勝カップを高々と掲げたブラジル選手と似た

心境にあるだろう。多くの学生は、つらい受験勉強に耐え、志望した大学に入学して幸せの絶頂にいることと思う。しかし、この幸せは、これからもずっと続く保障はどこにもない。優勝カップを高々と掲げ、ピッチの中央で歓喜するブラジル選手を、悔しさに耐えながら、ゴールポストに背をもたれたまま見つめていた、ドイツのGKカーン選手の姿は痛々しさが伝わり忘れがたいシーンである。

体育・スポーツには、このように成功や失敗などたくさんの感動が含まれている。スポーツによる感動、すなわち心が揺さぶられるような体験は、前述したような一部のトップレベルのスポーツのみに備わっているものではない。ごく一般的に行われている体育・スポーツにももちろん含まれている。しかし、わが国の体育・スポーツは、このようなことに目を向けずに行われてきているのが現状である。非常に残念なことに、筑波大学に入学する約3割の学生が過去の学校体育での苦いあるいは嫌な経験から、「大学まできて体育なんてやりたくない」という思いを抱えている。これは、講義終了時に全受講学生に課すレポートから読み取ることができるのだが、体育関係者は、この切なる訴えに真摯に耳を傾け、よりよい体育・スポーツのあり方や、授業を目指して努力しなければならぬまい。

1 筑波大学人間総合科学研究科体育センター長

2. 「スポーツ」とは何か

「体育」とは、英語の「physical education」の訳で、この単語は、明治時代の始めにアメリカ合衆国から入ってきた。「身体を目的とした教育」、すなわち「身体教育」が、時代を経るに従い「運動による教育」などに変容し、最近では「身体的教養」という言葉まで「体育」として使われている。「身体的教養」とは、「運動による人間形成機能」、「身体を通じての自己認識」、「他者理解」などと解される。

一方、「sport」は、明治時代に使われ始めた単語である。「sport」は、「運ぶ、持ち去る」という意味の「desportare」を語源とするが、16世紀には「sport」という単語が、イギリスの文献で見受けられるようになる。すなわち、英国とわが国では「sport」という言葉の使用に、少なくとも200年の開きがある。この開きが否応なしに、「sport」の理解度、成熟度の差として表れていることが理解できるのではないだろうか。

「スポーツとは何か」と問われて、即答できる人が何人いるだろうか。フランスの歴史学者のベルナル・ジレは、「遊戯」、「闘争」、「激しい肉体活動」をスポーツの3要素と捉えた。スポーツの定義にも、諸説いろいろあるが、この定義は個人的には、「スポーツ」を的確に言い表したものであると思っている。「闘争」は「闘争心」、「激しい肉体活動」は「肉体活動」と解してもよいだろう。

ジレが指摘したスポーツの3要素から、これまでのわが国におけるスポーツを推考したい。まず、「闘争(心)」と「(激しい)肉体活動」という観点から、わが国の体育・スポーツを顧みると、「闘争」と「肉体活動」に関しては、十分に満たしていると思われる。自分のスポーツ歴をフィードバックするか、あるいは現在の子どものスポーツ活動について考えてみると、これらの要素が強調され過ぎている

のではないだろうか。一方、「遊戯」という観点ではどうであろうか。ジレは、スポーツを構成する要素に「遊戯」を取り入れた。この「遊戯」をどのように解釈するかが、体育・スポーツを考察するにあたり、非常に重要であると考えている。

広辞苑(第四版)によると「遊戯」とは、「①あそびたわむれること。②幼稚園、小学校などで運動や娯楽、または社会性を身につけることなどを目的として一定の方法で行う遊び。③勝負ごと。」とされている。このように「遊戯」の辞書的な意味からもわかるように、わが国では、遊戯的に何かしようとする、とたんに肩の力を抜き遊び半分は物事に対応する様を示す傾向にある。しかし、そのような様態がジレのいう「遊戯」ではない。

オランダの歴史・人類学者であるホイジンガは、「遊戯」を「①自由性、②仮構性、③没利害性、④時間・空間の分離性、⑤秩序による支配性」と定義した。この定義こそが、「スポーツ」を読み解くうえで、重要な要素であると考えている。「自由性」とは、「主体性」とも解され、指示や強制されてするのではなく、自ら進んで行うことである。「仮構性」とは日常生活からある一時な領域へと踏みだしていくことであり、「非日常」ともいうことができよう。「没利害性」とは、文字通り利害が存在しないことである。「時間・空間の分離性」とは、遊戯は定められた時間・空間内で行われ、そこで終了することである。「秩序による支配性」に関しては、ホイジンガは「遊戯は秩序そのものである。どんな小さな違反でも遊戯をぶち壊し、遊戯からその性格を奪い去り、無価値なものにする。」と指摘している。

このようにホイジンガは、「遊戯」を一般の日本人が思い描くものとは全く違った捉え方をしているところに注目したいものである。確かに、言葉の定義は、その国の文化や社会背景が大きく反映し、絶対的な正しい捉え方

などはない。「スポーツ」が「sport」という英語の日本語訳であるということを見比べると、ホイジンガの「遊戯」の捉え方に準じて、「スポーツ」を定義づけることに異論はないだろう。

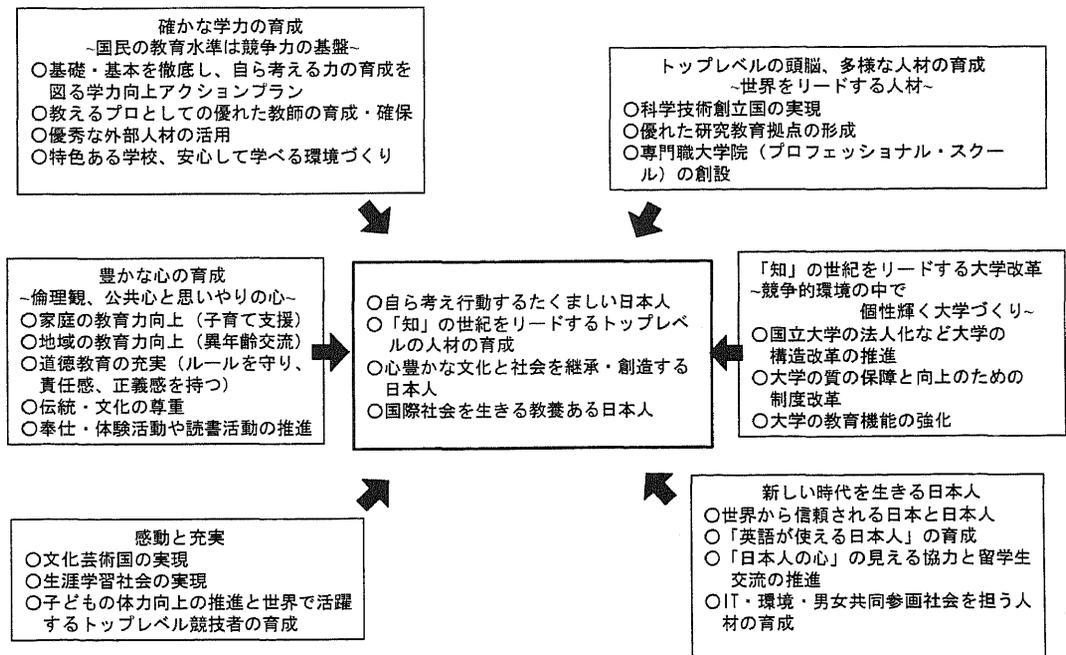
英語の「game」やドイツ語の「spiel」には、「遊戯、競技、試合、競技者」という意味が含まれている一方で、わが国では、「遊戯」という概念が試合や競技とは違う独立したものであるとして存在している。「遊戯」、「闘争(心)」、「激しい肉体活動」というこれら3つの要素を組み合わせたものが「スポーツ」であり、そのバランスをどのように取るかによってスポーツのあり方も変わってくる。

3. 体育・スポーツの意義

図1は中央教育審議会が、人材育成の基本的ビジョンとして示しているものである。その中で、「学校は、教育の専門機関として人

生にとって知と人格の両面での基礎作りをするべきである」としている。「知」のみではなく「知と人格の両面」という点を強調してみると、現在、どれだけの大学が「人格」という側面に目を向けて、教育活動を行っているであろうか。大学は専門教育ばかりを重視し、大学生としてふさわしい人格を育成する機会や授業が、十分に提供されているとは考えにくい。その点において「体育」という科目は、そのような「穴」を埋めることができる教科ではないだろうか。上記のビジョンでは、「豊かな心の育成—倫理観・公共心と思いやりの心—」を唱えている。パソコンと向き合いキーボードを操っているだけで、公共心や思いやりのある心を育てることはできない。

それでは具体的に、体育・スポーツにはどのような教育効果があるのか考えてみたい。本稿では、「主体性」、「運動」、「社会力」、「知」という4つの観点から稿を進めたい。ま



～画一から自立と創造～

図1 人間力戦略：新しい時代を切り拓くたくましい日本人の育成

ず、「主体性」についてである。体育・スポーツは、自分で行う行為すべてが自分に帰結する。前述の「自由性」とも関連するが、体育・スポーツは、命令されてするものではなく、自ら自立的に行うものなのだ。そこから、自立心や自律性が養われ、その結果としてアイデンティティ等、これは愛校心と置き換えても良いのだが、こういったものも育まれるのではないだろうか。大声や号令に頼らずに、自ら進んで行う積極的な姿勢こそが、体育・スポーツに関わる上で、極めて重要なキーワードになると考える。

続いては、「運動」である。なぜ、運動しなければならないのか。もちろん、ストレス解消や気分転換ということもあるだろう。しかしより重要なことは、体育・スポーツには、勝って雄叫びをあげたり点を取ってガッツポーズをとったりするような格好いい場面と、失敗する場面や痛い、怖い場面等に否応なしに遭遇する。人は、失敗しないための努力をしなければならないし、また、痛さや怖さを我慢しなければならないこともある。人は失敗を教訓とし努力や挑戦を重ね、ものごとを成功させようとする、このような過程で人は成長をとげるのではないだろうか。失敗しないために緻密にやらなければならない。失敗しないために繊細にやらなければいけない。そこを避けてしまったり気付かずにいたら、体育・スポーツをやる価値は半減してしまうだろう。

学生からは、1時間目から体育の授業をやってほしくない、昼食を食べた直後の3時間目に体育の授業をやってほしくない、などの要望も寄せられる。しかし、このような要望はすべて自分本位の基準で判断したものではないのか。朝早く眠いけれども我慢して1時間目の授業に出る。それ自体が「挑戦」でもあるのだ。これからの学生生活は、すべて自分でやらなければならない。楽をしようと思えばいくらでも楽できる状態にある。そこを

楽ばかりすることなく、我慢し努力することが大切であると考えます。

三点目は「社会力」である。社会力とは、社会を変える力を持って、アイデアを生み出し、実現する力のことである。その力の前提になるのは、他者に対する愛着・関心・信頼である。様々な人たちと交流することで社会力は醸成され、自己実現へとつながるのである。体育・スポーツは、自然や物を相手にするものもあるが、人間を相手に行うものが多い。そこには、否応なく人間関係が生じ、コミュニケーションをとらなければならない。人と人との繋がりや対話、これが社会力を育む好機になると思われる。

最後は、知である。運動・スポーツにももちろん知が必要である。有り余る知、知識を生かすためにも、幅広い人間性と見識がなければ、せっかくの知識も専門性も生かされることはない。

図2は、朝日新聞が実施した企業が求める人材と能力に関する調査結果の抜粋である。企業が求める人材と能力とは、社会が求める人材と能力とも解することができるだろう。この調査は100社を対象に、選択肢の中から3つ選ばせた。最も高い数値を示したのが、76社が選択した「コミュニケーション能力」である。続いて、「行動力」(56社)、「熱意」(41社)、「人柄」(32社)、「責任感」(19社)、「協調性」(12社)、「価値観」(9社)、「学生時代の活動」(8社)となる。「マナー」、「語学」、「成績」、「要領」を重視した企業はなかった。それでは、この調査で多数の企業が選択した能力は、大学のどのような科目で養うことができるのだろうか。「体育・スポーツ」が担うべき役割は、非常に大きいものがあると思われる。そして、上記に挙げた様々な力を総じて、「スポーツ力」と呼び、スポーツ力を持って人間力を高めていくことが望まれる。大学は、大学で教育し排出する学生を社会が受け入れる時代から、社会のニーズに応じた学生

企業の求める能力・人材像

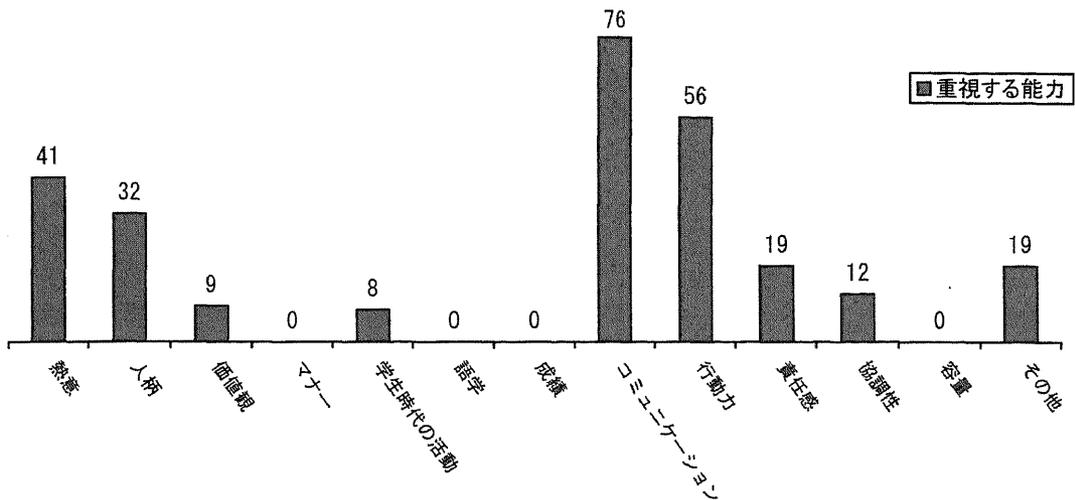


図2 企業の求める能力・人材像（朝日新聞2006年3月20日付けをもとに作成）

の教育を行い、社会に送り出すという発想の転換も求められている。社会が求めている大学教育は、「社会とはこういうものだ」ということを教え、それを体感、獲得できるカリキュラムをどれ位提供するかではないかと考える。

4. 学生のレポートから

本講義では、学生に「新たな大学生活と体育を受講するにあたっての抱負」というテーマでレポートを課している。毎年、二千人を超える学生のレポートから、様々な希望や決意、不安を読み取ることができる。

以下に何人かの学生の要約を掲載する。

・日本語・日本文化学類 S. Aさん

私は、体育が一番苦手な教科で大学でもやるのだと思うと、とても気が重くなっていたのだが、講義を受けて私の体育に対する考えが変わった。スポーツ力を通して人間力を高めるとい言葉で体育の授業を受けることはとても重要なことなのだ気付いたのだ。(中略)大学で私は知識だけをただ頭に詰めこ

むのではなく、他人との協調性や主体性を身に付けたいと考えている。そのために、体育は必要不可欠なのだ理解できた。

・比較文化学類 A. Hさん

今回の講義の中で用いられたVTRに、私は涙を抑えられなくなってしまった。私ばかりでなく、周りでも目を押さえる姿がちらほら見受けられた。何故それほどまでにスポーツは、人の心を動かしてしまうのだろう。(中略)今回の講義において何か重要なことが掴めた気がした。(中略)汗とか必死な声とか、スポーツにみられる様々な要素は強烈に私たちに訴えかけ共感の輪に巻き込む。大学の体育を受講するにあたって、自分も常に誰かに影響を与える存在であることを理解し、一人のプレイヤーとして活動をしっかりやりたいと思う。

・自然学類 R. Mさん

4月から新しい生活が始まり、楽しみなことも多い反面、不安なことも、家族と離れて暮らす寂しさも感じています。しかし、一生

懸命に努力し、この大学に入学することができたのだから4年間を有意義に過ごしたいと思っています。そして社会に必要とされる人間になりたいです。今回の講義を聞いて4年間を有意義にするために体育の授業は大きな役割を担っているのではないかと感じました。今回、萩原先生に教えていただいたこと、そして自分が感じた気持ちを大切に、大学生活すべてにおいて積極的に取り組んでいきたいと思います。

・日本語日本文学類 G. Mさん

私にとって体育の授業の印象は暗闇同然。運動することは好きだが苦手でいつも下から数えたほうが早い。極度の運動音痴なのである。(中略)この12年間、特に6年間で完全に体育＝不得意科目として取り組んでしまった私はどうしたらよいのだろうか。それは当たりまえのことだが、積極的に自分の選択した競技に打ち込んでいくしかない。その中で、自分でプレーしながらも、他人へのやさしさを忘れてはならない。今まで私が周囲の人々に感じていたのは「やさしさ」ではなく「申し訳なさ」であり、それは他人のために感じていたのではなく、ある種の自己責任の回避であったと思う。これは自己中心的な考えに過ぎない。これから受講していく時には、ほとんどの人が初対面であり、週1時間の付き合いとなる人も多いだろう。その中でうまくコミュニケーションを取り、やさしさを忘れずに、信頼関係を築いていくことができたらずばらしいのではなからうか。

・医学専門学群 K. Sさん

これまで受けてきた12年間の体育教育は、成長期を健康に過ごすためにあらかじめ計画されたもので、受動的な面が多かった。(中略)一方、大学における体育の意義は、子供から大人への重要な時期を健全に過ごすことと、社会生活にスポーツが必要不可欠だとい

うことを学ぶところにある。(中略)筑波大学では、他の大学に類をみないほど多くの種目が開設されており、大学生生活を豊かに過ごすには恵まれた環境が整っている。しかし、最も重要なのはスポーツをしようとする意欲であり、学ぼうとする自分自身の姿勢に大学での成功はかかっているのである。

・国際総合学類 S. Nさん

今回の講義では、運動の身体的・精神的健康のための必要性を改めて感じさせられたばかりでなく、運動における「遊戯」性、“game”という性質の重要性に気づかされた。“sport”の語源である“disport”という単語を英英辞典で引くと、“amuse”“happy”“energetic”などという単語が目につく。つまり、“sport”という言葉には本質的に楽しむという遊戯性が含まれているのである。講義でこのことに気がついたとき、私は中学校や高校での体育の授業をどうして一度たりと好きになることができなかったのかを理解した。私は自分自身の楽しみのため、さらにいえば、“happy”，幸せのために運動をしていなかったのである。(中略)当たり前のようで今まで考えていなかった運動することの意味が少し見えたとき、今後の体育そしてスポーツへの私の態度は大きく変わることであろう。スポーツとは、させられるものではなく、自ら進んでするものなのである。私は、常にこのことを忘れずに、体育・スポーツに挑んでいきたいと思う。

このように、入学直後の学生は、体育という科目だけでなく、大学や大学生活に希望や期待、不安など様々な思いを抱えている。それらの不安や心配を、少しでも和らげたり取り除くことができたりしたらと始めたのがこの講義である。大学は何よりも、学生が輝いてこそ良い大学といえるだろう。学生自身が輝く、そのための体育・スポーツでありたい

と強く思っている。筑波大学を、「良い大学」にしようと呼んでいる本講義が、少しでも学生の体育に対するイメージを刷新し、新たな

価値を見出し、ひいては、充実した大学生活を送る好機となるのであれば望外の幸せである。